台大日本語文研究第 7 期
2004 年 12 月，頁 71~90
本文 2004.9.29 收稿，2004.11.11 通過刊登

「牡丹燈記」系譜・再考－關於雙頭牡丹燈－

高　惠玲*

摘　要

『剪燈新話』是明代瞿佑的文言小說集，全書分四卷，每卷各五篇，共二十篇，書後另有附錄「秋香亭記」及「寄梅記」兩篇。本書在日本天文初期由京都五山的禪僧自中國帶回日本，據說最初在五山的僧侶間玩賞，之後才流入坊間。山口剛氏曾在『山口剛著作集・第二』中指出：這本書如果沒有傳到日本，那麼江戶時代新怪談的黎明大概沒有那麼早到來吧！因此可知此書對近世以後的日本文學產生了極大的影響。

書中最爲人所知是「牡丹燈記」，收錄在第二卷第四話，此篇傳至日本之後被翻譯或翻案成各式各樣的作品。剛開始爲翻譯性作品，有『漢和希夷』、『奇異雜談集』、『霊怪草』等，之後陸續被翻案及改寫。如浅井了意『伽婢子』中的「牡丹灯篭」、上田秋成『雨月物語』中的「吉備津之釜」、山東京伝的『安積沼』『浮牡丹全伝』『劇場花牡丹灯篭』、鶴屋南北的『阿国御前化粧鏡』、三遊亭円朝的『怪談牡丹灯篭』等。「牡丹燈記」可說是最能代表『剪燈新話』的作品。

當我們追溯日本「牡丹燈記」的系譜時，應當重視與原著的比較，本文特別針對原著中的「雙頭牡丹燈」在日本的翻譯問題及翻案作品中如何變形加以考察，進而探究中日怪異談在文學創作中的結構性差異。

關鍵詞：盟器婢子、雙頭牡丹、二分化、禮教、情慾

臺灣大學學術期刊資料庫

*慈濟大學東方語文學系講師

The Genealogy and Reconsideration of ‘’Muu Dna Deng Jih’’ - Focusing on the Original Setting “Bicipital Peony Chinese lantern”and Its Modification-

Gao, hui-ling*

Abstract

“Jean Deng Shin Huah’’ is a collection of twenty novels by Qu You from the Ming Dynasty. There are four volumes and each volume has five pieces and two appendixes. “Chiou Shiang Tyng Jih” and “Jih Mei Jih”.

Gozan, the Zen monk of Kyoto, brought the collection to Japan in the early Tenmon period. At first it was only read in Zen temples, but later it was available to the public. As Mr. Takeshi Yamaguchi indicated, the first Japanese ghost stories of the Edo period were inspired by this work, and it has had a great influence on Japanese modern literature.

“Muu Dan Deng Jih” (the fourth talk of the second volume) is the most famous piece, and soon after it was introduced into Japan, it was translated or adapted into various versions.

Due to the importance of comparing current versions to the original, I consider the structural differences between Chinese and Japanese ghost stories, focusing on the setting of〝Bicipital Peony〞 in the original work and its modifications after it was brought to Japan.

Key words: Meikibouko（dolls）, Bicipital Peony, division, ethic, eros

臺灣大學學術期刊資料庫

* Instructor, Department of Oriental Literature, Tsu-chi University

「牡丹灯記」の系譜·再考—双頭牡丹灯をめぐって—

高 惠玲*

要 旨

『剪燈新話』は明代瞿佑の作で、全四巻、各巻五篇で全二十篇、それに「秋香亭記」「寄梅記」の二篇を付録とする文言小説集である。日本には天文の初め頃京都五山の禅僧によって持ち帰られ、初めは五山の禅林で翫ばれていたが、ついで坊間へと出回ることになったという。この書が日本に渡らなかったならば江戸時代の新怪談の黎明はああまで早くは来なかったであろう、との山口剛氏の指摘もあるように、近世以降の日本文学に与えた影響は極めて大きい。

中でも特によく知られている「牡丹灯記」は、この書の第二巻の第四話として収められ、日本に伝来するや様々に翻訳、翻案された。翻訳としては『漢和希夷』、『奇異雑談集』、『霊怪草』などがあり、また後には浅井了意の『伽婢子』「牡丹灯篭」、上田秋成の『雨月物語』「吉備津の釜」、山東京伝の『安積沼』『浮牡丹全伝』『劇場花牡丹灯篭』、鶴屋南北の『阿国御前化粧鏡』、そして明治になると三遊亭円朝の『怪談牡丹灯篭』と、次々に翻案されていく。『剪燈新話』の解説を「牡丹灯記」の系譜を以てすることが可能なほど、まさに『剪燈新話』を代表する一篇であると言ってよい。

本発表は、日本におけるその「牡丹灯記」の系譜を見ていく上で、原典との比較を通して考え直すべき点があるのではないか、という問題意識に立ち、とりわけ原話における「双頭牡丹灯」という設定を軸に、それが日本で蒙った変形に留意しながら、日中の怪異譚の構造的差異にまで考察を進めていくことを目的とするものである。

キーワード：盟器婢子、双頭牡丹、二分化、礼教、欲情

臺灣大學學術期刊資料庫

*慈濟大學東方語文系講師

「牡丹灯記」の系譜·再考—双頭牡丹灯をめぐって—

高 恵玲

一、はじめに

『剪燈新話』は明代瞿佑の作で、全四巻、各巻五篇で全二十篇、それに「秋香亭記」「寄梅記」の二篇を付録とする文言小説集である。日本には天文の初め頃京都五山の禅僧によって持ち帰られ、初めは五山の禅林で翫ばれていたが、ついで坊間へと出回ることになったという。この書が日本に渡らなかったならば江戸時代の新怪談の黎明はああまで早くは来なかったであろう、との山口剛氏の指摘もあるように、近世以降の日本文学に与えた影響は極めて大きい。

中でも特によく知られている「牡丹灯記」は、この書の第二巻の第四話として収められ、日本に伝来するや様々に翻訳、翻案された。翻訳としては『漢和希夷』、『奇異雑談集』、『霊怪草』などがあり、また後には浅井了意の『伽婢子』「牡丹灯篭」、上田秋成の『雨月物語』「吉備津の釜」、山東京伝の『安積沼』『浮牡丹全伝』『劇場花牡丹灯篭』、鶴屋南北の『阿国御前化粧鏡』、そして明治になると三遊亭円朝の『怪談牡丹灯篭』と、次々に翻案されていく。『剪燈新話』の解説を「牡丹灯記」の系譜を以てすることが可能なほど、まさに『剪燈新話』を代表する一篇であると言ってよい。

本発表は、日本におけるその「牡丹灯記」の系譜を見ていく上で、原典との比較を通して考え直すべき点があるのではないか、という問題意識に立ち、とりわけ原話における「双頭牡丹灯」という設定を軸に、それが日本で蒙った変形に留意しながら、日中の怪異譚の構造的差異にまで考察を進めていくことを目的とするものである。

臺灣大學學術期刊資料庫

二、『洛陽牡丹記』、『春渚紀聞』における「双頭牡丹」

では最初に、「牡丹灯記」における「双頭牡丹灯」の意味付けに関

する太刀川清氏の次のような指摘に注目したい。

> その盟器婢子が挑げる双頭牡丹灯の妖麗にして、不吉な取り合わせこそ「牡丹灯記」の怪事の核心をなすもので、この物語を無気味な怪談の世界に導いたのが双頭牡丹灯であったのである。[1]

氏の論によれば、不吉な双頭牡丹灯がいつも盟器婢子金蓮を誘導しているが故に、怪事が発生するのだという。そして、何故双頭牡丹灯が不吉なのかについては二つの理由が挙げられている。先ず一つは喬生の供書に出てきた両頭蛇が不吉であり、双頭牡丹も同じ「双頭」なので、不吉である。そして、二つ目の理由としては、「『春渚紀聞』や『洛陽牡丹記』には牡丹花の一種双頭紅、双頭紫の牡丹花は奇異なるもの妖なるものとしている」[2]からである。しかし、同じ「双頭」だから不吉という立論は改めて検討する必要があると思う。何故かというと、「兼金必貴雙　珏玉不獨隻　嫣然彼叢生　佳處亦求匹」[3]のように「貴雙」という中国古来の思考で双頭牡丹を詠む例があるからである。また、氏の二つ目の論拠である『春渚紀聞』及び『洛陽牡丹記』を調べて見ても、「双頭牡丹」が「奇異なるもの妖なるもの」などという叙述は見当たらない。この点は以下で詳述しよう。また、双頭牡丹灯の実態について氏は次のように指摘している。

> 『春渚紀聞』には「一つの蒂に二輪の花をつけた双頭牡丹一枝」とあり、『洛陽牡丹記』には牡丹花の一種双頭紅、双頭紫を説明して、「二花皆並蒂而生如鞍子　而不相連屬者也」とあるところから勘案すると『奇異雑談集』や『漢和希夷』は、その蒂を灯籠にあしらって、これに二輪の花を並べ添えたものと見ることが出来る。『伽婢子』の挿絵もこの種のものであり、この形がかわることなく今後も描き続けられたことは明治に入っての『怪談牡丹灯籠』や、『夜窓鬼談』の「牡丹灯」を見ればあきらかで

[1] 太刀川清『牡丹灯記の系譜』(平成十年三月三十日、勉誠社)、十六頁
[2] 注1書、十五頁
[3] 『方舟集』巻一「同鄧使君賞雙頭牡丹」

臺灣大學學術期刊資料庫

ある。[4]

挿絵から判断すれば、氏の指摘した通りかもしれないが、文字による叙述のレベルになると、双頭牡丹灯は日本の翻訳や翻案において、その形にせよ、象徴性にせよ、いろいろと変容を蒙っている。この点については第三節で考察を行いたいと思う。

さて、『洛陽牡丹記』の名を持つ作品には、歐陽修の『洛陽牡丹記』、並びに周師厚の『洛陽牡丹記』の二つがある。まず、歐陽修のものを見てみよう。

『洛陽牡丹紀』宋.歐陽修

至牡丹則不名，　直曰花。其意謂天下真花獨牡丹，其名之著不假曰牡丹可知也。其愛重之如此。說者多言洛陽于三河間，古善地，昔周公以尺寸考日出沒，測知寒暑風雨乖順于此，此蓋天地之中，草木之華得中氣之合者多，故獨與他方異。　予甚以為不然。夫洛陽于周所有之土四方入貢道里均，乃九州之中，在天地崑崙磅礴之間，未必中也。又況天地之和氣，宜遍被四方上下，不宜限其中以自私。夫中與和者，有常之氣。其推于物也，亦宜為常之形。物之常者不甚美，亦不甚惡，及元氣之病也，美惡隔開而不相和入，故物有極美與極惡者，皆得于氣之偏也。花之種其美與夫癭木臃腫之鐘其惡，醜好雖異，而得分氣之偏病，則均。洛陽城圓數十里，而諸縣之花莫及城中者，出其境則不可植焉。豈又偏氣之美者，獨聚此數十里之地乎？此又天地之大不可考也。已凡物不常有而危害乎人者曰災，不常有而徒可怪駭不危害者曰妖，語曰：天反時為災，地反物為妖，此亦草木之妖，而萬物之一怪也。

歐陽修の『洛陽牡丹記』では「双頭牡丹」の用語がなく、双頭牡丹についての叙述もない。太刀川氏の「奇異、不吉」説と関係がありそうなのは傍線部分の「不常有而徒可怪駭不危害者曰妖」のところであるが、ここでも一般的概念を述べているもので、専ら双頭牡丹を指しているわけではない。

臺灣大學學術期刊資料庫

[4] 注 1 書、十五頁

次に周師厚の『洛陽牡丹記』を見てみよう。

雙頭紅，雙頭紫者，皆千葉花也。二花皆開蒂而生如鞍子而不相連屬者也。

唯應天神御花圃中有，不有多葉者，蓋地勢有肥瘠，故有多葉之變爾。培壅得地力有簇五者，然開頭愈多，則花愈小矣

傍線部分からわかるように、周師厚は双頭牡丹のことを「妖なるもの」として描いてはいないどころか、「唯應天神御花圃中有」と、その高貴性をそれとなく伝えようとしているのである。

次に『春渚紀聞』において、双頭牡丹という用語が出てくるのは、「瓦缶氷花」の話の中での一個所しかない。念のため、以下に全文を引用しておく。

宣義郎萬延之　錢塘南新人　劉輝榜中乙科　釋褐 性素剛 不能屈曲州縣 中年拂衣而歸　徙居餘杭 行視苕霅陂澤可為田者　即市之　遇歲運土 田圍大成　歲收租入數盈萬斛　常語人曰　吾以萬為氏　至此足矣 即營建大第 為終焉之計 家蓄一瓦缶　蓋初赴銓時 遇都下銅禁嚴甚　因以十錢市之 以代沃盥之用　時當凝寒　注湯頰面　既覆缶出水　而有餘水留缶　凝結成氷 視之桃花一枝也　眾人觀異之　以為偶然　明日用之　則又成開雙頭牡丹一枝 次日又成寒林滿缶　水村竹屋 斷鴻翹鷺 宛如圖畫遠近景者　自後以白金為護什襲而藏　遇凝寒時　即預約客張宴以賞之　未嘗有一同者　前後不能盡記 余與賞集數矣　最詭異者上皇登極 而致仕官例遷一秩　萬遷德宣郎　詔下之日　適其始生之晨　親客畢集　是日復大寒　設缶當席　既凝氷成象　則一山石上坐一老人　龜鶴在側　如所畫壽星之象　觀者莫不嗟嘆異以為器出於陶 革於凡火 初非五行精氣所鐘 而變異若此 竟莫有能言其理者　然萬氏自得缶之後　雖復資用饒給　其剝下益甚後有誘其子結婚副車王晉卿家　費用幾二萬緡而娶其孫女　奏補三班借職　延之死　三班亦入鬼錄　餘資為王氏席卷而歸　二子日就淪替　今至寄食於人　眾始悟萬氏之富　如氷在玩　非堅久之祥也 後歸蔡京家云

臺灣大學學術期刊資料庫

以上の話では双頭牡丹は瓦の缶の底にできた様々な氷花の模様の一つに過ぎない。そして傍線部の叙述から、不吉と思われるのは氷花の模様ではなく、その模様が「非堅久」だから、ということがわかる。故に双頭牡丹が不吉であるなどいう叙述はここにも見当たらない。

三、中国古典における「双頭牡丹」

四庫全書に出てくる「双頭牡丹」の用語は全部で七十二例ある。前述した『春渚紀聞』「瓦缶氷花」の例もその中の一つである。これらは「双頭牡丹」の容姿だけを描くものを除けば、次のようにいろいろな喩えに用いられていることがわかる。

①才華並美之二友（９例）

高宗後苑雙頭牡丹昭容詩云勢如連璧友心似臭蘭人[5]

「連璧」とは「双璧也、論才華並美之二友」の意味で、「臭蘭」は「二人同心其利斷金同心之言其臭如蘭」のことを意味しているものである。

②仲良しの兄弟（２例）

天公幻化不經意　雙萼忽然枝葉同　一似人間好兄弟　朱鞍錦轡踏春風[6]

③長寿（２例）

群英日零謝　並蒂發奇芳　願以附驛使　為兄壽且昌[7]

傳聞是日聚景上池以雙頭牡丹進上捧觴再拜上千萬歲壽三宮歡愉[8]

④子孫競爽（１例）

瑞雲紅牡丹　兩花并蒂　詩人以為謝氏子孫競爽之詳矣

並蒂開花自一奇　人鍾和氣物何私　文華軾轍趨京日　風韻機雲入洛時　定與子孫呈上瑞　肯同兒女逞多姿　闌干穩護紅雲著　實在枝頭驗我詩[9]

---

[5] 『唐詩紀事』、卷三
[6] 『刻源文集』卷三十「題番陽徐氏雙頭牡丹圖」、元　戴表元撰　明　周儀輯編
[7] 『南陽集』卷十四「和太素雙頭牡丹兼呈子華」　宋　趙湘
[8] 『寶真齋法書贊』卷三　宋　岳珂
[9] 『雪樓集』卷二十九　「用韻賦解安卿雙頭牡丹」

臺灣大學學術期刊資料庫

⑤両皇后を喩える（２例）

二花並發者兩宮修德同膺福祉之象也雙枝合幹者兩宮共治永安宗社之符也[10]

曰雙頭者兩宮之應同德之象馨香升聞億兆攸仰[11]

⑥美貌の姉妹

（七十二例の中で一番多い喩えで、合わせて十一例ある。）

晁無咎和李秬雙頭牡丹有云二喬新獲吳宮怯雙隗初臨晉帳羞月地故應相伴語風前各是一般愁[12]

春入多情草木妖　霓裳相倚奏咸韶　玉欄一樣紅如洗　不比觚稜鎖二喬[13]

牡丹意態已無窮　況是連房鬥淺紅　曉色競開雙萼上　春光分占一枝中　娥英窈窕臨湘浦　姊妹輕盈倚漢宮　只為多嬌便相妒　芳心相隔不相同[14]

以上の考察によれば、双頭牡丹が四庫全書の中で「不吉」なものとして扱われている例は一つもない。同じ四庫に収められている『玉海』巻五十九「天聖清輝殿賦詩　藻珠殿賦詩」に「四年四月乙卯出後苑雙頭牡丹圖示輔臣令館閣獻詩賦兩制自章得象以下十三人三館自康孝基以下二十七人歌詩一百四十篇」と記されていることからも、双頭牡丹が「令館閣獻詩賦」に値するめでたいものとされていたことが窺われ、そして、一番多い例は美貌の姉妹の喩えであることがわかる。

さて、ここで少々別の角度から問題を見てみることにしたい。太刀川清氏の考察によると、「牡丹灯記」の原形は下記の『北夢瑣言』巻第九「芻靈祟」だという。[15]

---

[10] 『文莊集』、巻二十三　「景靈宮雙頭牡丹賦應制并序」　宋　夏竦撰
[11] 『景文集』、巻一　「上苑牡丹賦并序」　宋　宋祁
[12] 『墨莊漫錄』巻八　宋　張邦基
[13] 『秋崖集』巻一　「次韻雙頭牡丹」　宋　方岳
[14] 『青山續集』巻六、宋　郭正祥撰
[15] 注１書、十二、十三頁参照。注１書が引用した『北夢瑣言』の原文には間違いがあるので、本稿の引用は『歷史史料筆記叢刊　唐宋史料筆記　北夢瑣言』（2002年６月、中華書局）によるものである。

臺灣大學學術期刊資料庫

唐文德中　小京官張　忘其名　寓蘇台　子弟少年　時在丈人陸評事院往來　為一美人所悅　來往多時　久而心疑之　尋病瘠　遇開元觀吳道士守元曰　子有不祥之氣　授以一符　果一冥器婢子　背書紅英字　在空舍柱穴中　因焚之　其妖乃絕　聞於劉山甫

中国の神異小説には、上記の盟器婢子紅英のように、偶像が妖異をなす例が少なくない。沢田瑞穂氏の『鬼趣談義』(昭和５１年　国書刊行会）中の「土偶妖異記」によれば、偶像は、たとえそれが生命のない木石土偶であっても、人の姿に似せてつくられるなら、やがてそれは人間のごとく行動し、ついには妖異をなすにいたり、寺廟叢祠の泥塑女神や壁画女神が、人間の女性よろしく男に通い淫佚を貪ることもあるという。まさに「牡丹灯記」の金蓮が供述した「面目機發比人具體而微既有名字之稱可乏精靈之異因而得計」の通りである。次の二例が類似の話である。

「康王廟女」『神女傳』　孫頠 輯

宋劉子卿徐州人也 居廬山虎溪 性悠閒好學 愛花種樹 其江南花木無不植者 文帝元嘉三年春 臨翫之際 忽見雙蝶 五彩分明 來遊花上 其大如鷰 一日中或三四往復 子卿訝之 一夕月朗風清 歌吟之際 忽聞扣扃有女子語笑之音 子卿異之 乃出戶 見二女各十六七 衣服霞煥 容止甚都 謂子卿曰 君常怪花間之物 感君之愛故來相詣 子卿言之坐 謂二女曰 居止僻陋 無酒敘情 有慙於 此一女曰來此之意 豈求酒耶 山月已斜 夜將垂曉 君子豈有意乎 子卿曰 鄙夫唯有茅齋 願申繾綣 二女東向坐者笑謂西向坐者曰 今宵讓姊 因起送子卿之室曰 郎閉戶雙棲 同衾並枕來夜之歡 願同今夕 方曉 女乃去 及夕 二女又至 留妹同寢 卿問女曰 我知卿二人非人間之有 願知之 女曰但得佳妻 何勞執問 自此姊妹每旬更至 如是數年 後子卿遇亂歸鄉 二女遂絕 廬山有康王廟 去所居二十里餘 子卿一日訪之 見廟中泥塑二女神像并壁間畫二侍者 容貌依稀有如前遇 疑此是之[16]

[16] 『叢書集成新編第八十二冊』、新文豐出版公司印行、184 頁

臺灣大學學術期刊資料庫

「土偶胎」『夷堅甲志』巻第十七 宋 洪邁 撰

仙井監超覺寺 九子母堂 在山顛 一行者姓黃 主給香火 顧土偶乳婢 乳垂於外 悅之 每至必摩拊咨惜 一旦 偶人目動 遂起而行 攜手入屏後狎呢 自是日以為常 累月矣 積以臥病 猶自力登山不已 主僧陰伺之 至半山 即有婦人迎笑 明日尾其後 婦人復至 以柱杖擊之 鏗然仆地 於碎土中得一兒胎 如數月孕者 令行者取歸 暴為屑 何藥以食 遂瘉[17]

土偶などが妖異をなす話は『夷堅志』によく現れ、上記の「土偶胎」のほかに、甲の巻十七「永康倡女」、乙の巻十二「肇慶土偶」、丙の巻五「西洋廟」、支甲の巻五「唐四娘侍女」、巻八「王公家怪」、支乙の巻四「葉氏庖婢」、支景の巻三「建場驛小兒」などがある。

ところで、前述したように太刀川氏の考察によると『北夢瑣言』が「牡丹灯記」の原形だということになるが、氏の論が妥当だとすれば、盟器婢子紅英の二分化、すなわちその役割が符女と金蓮とに二分され、その前を双頭牡丹灯が誘導するという形も、間違いなく瞿佑の手による創作であろう。先ほど考察したように中国の古典では双頭牡丹を以て親を同じくする美貌の姉妹を喩える例が極めて多いところから、瞿佑も、盟器婢子「紅英」から二分された、すなわち根を同じくする符女と金蓮のことを双頭牡丹に喩えようとしたとも考えられるのではなかろうか。また、同じ盟器婢子なのに、名前を「紅英」から「金蓮」に変えなければならなかったのにもわけがあるだろう。金蓮とは中国女性の纏足の別称でもあり、それ自体でエロティックな意味合いを帯びている。また上述したように盟器には淫佚を貪る性質がある。瞿佑がわざとこの名を付けたのは、盟器婢子に人間性の中の欲情の部分を押し付ける一方で、それに対する符女を「礼教」に従う人物として造形しようとしたのではなかろうか。符女と金蓮は人間の二面性の現れであり、同じ蕾を持つ双頭牡丹は、まさにこれを喩えているものと考えられよう。

臺灣大學學術期刊資料庫

[17] 注 16 書、343 頁

四、日本に伝来した「牡丹灯記」の変容

さて、符女、金蓮及び双頭牡丹灯の相関関係は原作が日本に伝来し、翻訳、翻案されるにつれ、如何に変貌してしていくのか、それをこの節では『奇異雑談集』「女人死後男を棺の内へ引込ころす事」、『伽婢子』「牡丹灯籠」および三遊亭円朝『怪談牡丹灯篭』の三作を取り上げ、原作と比較しながら、考察していきたいと思う。

先ず、『奇異雑談集』「女人死後男を棺の内へ引込ころす事」（以下『奇異雑談集』と略す）を見てみよう。

①『奇異雑談集』は、前半部ではほぼ原作に従ったままで、例えば次の二個所がそうである。

原作：見一丫鬟挑雙頭牡丹燈前導一美人隨後

『奇』：丫鬟の童女一人ありて双頭の牡丹燈をかたにかかげて。さきにゆけば後に。窈窕たる美女一人したがつて。

原作：奉化符州判女麗卿之柩柩前懸一雙頭牡丹燈燈下立一盥器婢子背上有二字曰金蓮

『奇』：故奉化府州判のむすめ麗卿の柩と云々。前に双頭の牡丹灯をかけ。下に一の丫鬟の童女を立たり。そのうしろに金蓮の二字あり。

ところが、喬生が袞繡橋に友を訪れる段りから、原作とずれていく。

原作：「一月有餘 往袞繡橋訪友 留飲至醉 都忘法師之戒 逕取湖心寺路以回 將及寺門 則見金蓮迎拜于前曰 娘子久待何一向薄情如是 遂與生俱入西廊」

『奇』：われ袞繡橋の邊にゆきて。友をとはんといひし。そののち数日喬生をみざれば。知音その久しく。かへらざることをあやしんで。袞繡橋の邊にゆきて。そのともの家をとへば。友のいはく。喬生数日さきに。ここにをひて。酒をのみてよびてかへる。湖心寺のみちをゆくとみて。そののちはしらずといふ。知音のおもへらく。魏法師のいましめをわすれ。又湖心寺にゆくやといひて。湖心寺

臺灣大學學術期刊資料庫

の門に入。

『奇異雑談集』では、原作の傍線部分を省いた形で話を進めた結果、金蓮の出番が奪われるてしまうのである。そして結末の部分になると、原作では喬生、符女、金蓮三人を審判する場面があり、三人それぞれの供書と判決があって、最後に「燒毀雙明乙燈押赴九幽之獄」という決着が付けられる。しかし、『奇異雑談集』では次のように、供書も判決の詳細も省かれている。

原作：(a) 受命而往不移時以枷鎖押女與生并金蓮俱到鞭箠揮扑流血淋漓道人苛責良久令其供狀將吏以紙筆授之遂各供數百言今錄其略於此

喬生供曰

伏念某喪室鰥居倚門獨立犯在色之戒動多慾之求不能效孫生見兩頭蛇而決斷乃至如鄭子逢九尾狐而愛憐事既莫追悔將奚及

符女供曰

伏念某青年棄世白晝無隣六魄雖離一靈未泯燈前月下逢五百年歡喜冤家世上民間作千萬人風流話本迷不知返罪安可逃

金蓮供曰

伏念某殺青為骨染素成胎墳壠埋藏是誰作俑而用面目機發比人具體而微既有名字之稱可乏精靈之異因而得計豈敢為妖

供畢將吏取呈道人以巨筆判曰

蓋聞大禹鑄鼎而神姦鬼秘莫得逃其形溫嶠燃犀而水府龍宮俱得現其狀惟幽明之異趣乃詭怪之多端遇之者不利於人遭之者有害於物故大厲入門而晉景歿妖豬啼野而齊襄殂降禍為妖興災作孽是以九天設斬邪之使十地列罰惡之司使魑魅魍魎無以容其間夜叉羅刹不得肆其暴矧此清平之世坦蕩之時而乃變化形軀依附草木天陰雨濕之夜落參橫之晨嘯于梁而有聲窺其室而無睹蠅營狗苟羊狠狼貪疾如飄風烈若猛火

臺灣大學學術期刊資料庫

喬家子生猶不悟死何恤焉符氏女死尚貪嫋生可知矣況金蓮之怪誕假盟器以矯誣惑世誣民違條犯法狐綏綏而有蕩鶉奔奔而無良惡貫已盈罪名不宥陷人坑從此填滿迷魂陣自此打開燒毀雙明乙燈押赴九幽之獄

判詞已具主者奉行急急如律令急件（b）三人悲啼躊躇為將吏驅捽而去道人拂袖入山明日眾往謝之不復可見

『奇』:（aa）吏すなはち行て時をうつさず。枷鎖をもつて。三人ともに。ひひてきたり。むちをもってうつ事。はかりなし。血流れてやまず。道人ことばをもつて。かしやくする事やゝ久し。（bb）三人のゆふれいみな諾伏していはく。あへてふたゝびたゝりをなし。人をわずらはす事。あるべからずといふて。拝しさつて見えず　道人と吏と。ともにさりてかへるなり。翌日衆みな山にのぼりて。謝せんとすれば。ただ草庵のみありて。

『奇異雑談集』傍線部分（aa）は完全に原作にしたがったままと言えるほどであるが、その後の三人の供書と判決の部分がすっぱり切り捨てられ、傍線（b）のところに繋がって行くのである。『奇異雑談集』傍線部分（bb）では、三人が「拝しさつて見えず」というところが原作の「三人悲啼躊躇為將吏驅捽而去」と相違してはいるが、ほぼ原作に従っている。

供書と判決文が捨象されたあげく、金蓮も双頭牡丹灯も『奇異雑談集』の結末で姿を消し、作品全体はまさしく題名「女人死後男を棺の内へ引込ころす事」が示す通り、符女と喬正に焦点を当てるものとなってしまい、金蓮も双頭牡丹灯もこの奇異なる話を飾るための小道具にすぎず、プロットの発展に影響を持たなくなる。『奇異雑談集』の写本での題名「牡丹灯の記」が、刊行時に現行の題名に変えられたのも、その影響によるものではないかと思われる。

②『伽婢子』「牡丹灯籠」

浅井了意『伽婢子』「牡丹灯籠」（以下『伽婢子』と略す）は『奇

臺灣大學學術期刊資料庫

異雑談集』の翻訳とは性質が違って翻案である。そのため原作の時代背景が捨てられ、日本の時代、風俗、人物に置き換えられる。符女は弥子、金蓮は浅茅となり、双頭牡丹灯も日本の灯篭へと変更されたのである。

原作：十五夜三更盡遊人漸稀見一丫鬟挑雙頭牡丹燈前導一美人隨後約年十七八紅裙翠袖婷婷嫋嫋

『伽婢子』：十五日の夜いたくふけて、あそびありく人も稀になり、物音もしづかなりけるに、ひとりの美人、その年二十ばかりとみゆるが、十四五ばかりの女の童にうつくしき牡丹花の灯篭もたせ、さしもゆるやかに打過る。

原作では符女が「約年十七八」だが、『伽婢子』の弥子は二歳も増え、「二十ばかりとみゆる」となる。そして、金蓮の年は原作では明記されていないが、『伽婢子』の浅茅は「十四五ばかり」と設定される。こうした年の差の明白な決め付けによって、「十四五ばかりの女の童」の浅茅（金蓮）が「二十ばかりとみゆる」大人の弥子（符女）に連れられていくことになったのではなかろうか。次に注目すべきなのは、原作での「雙頭牡丹燈」も、『伽婢子』では「雙頭」の二文字がなくなり、その代わりに「うつくしき」という形容詞が付けられたことである。

原作：生即趨前揖之曰弊居咫尺佳人可能回顧否女無難意即呼丫鬟曰金蓮可挑燈同往也於是金蓮復回生與女携手至家

『伽婢子』：それがしのすむところは、塵づかたかくつもりて、見ぐるしげなるあばらやなれど、たよりにつけてあかし給はば、宿かしまいらせむとたはふるれば、女うちえみて、窓もる月をひとり詠めてあくるわびしさを、うれしくもの給ふ物かな。情によは（弱）るは人の心ぞかしとて、立ちもどりければ、萩原よろこびて、女と手をとりくみつつ家にかえり、

原作では金蓮及び双頭牡丹灯はいつも符女を誘導するという形になっているので、傍線部分がプロットの連続上必要となるのである。

臺灣大學學術期刊資料庫

が、『伽婢子』では、女の首肯を得た萩原は、「よろこびて、女と手をとりくみつつ家にかえ」るのであり、浅茅と牡丹花の灯篭の誘導は必須なことではない。

原作:「一月有餘 往衮繡橋訪友 留飲至醉 都忘法師之戒 逕取湖心寺路以回 將及寺門 則見金蓮迎拜于前曰 娘子久待何一向薄情如是 遂與生俱入西廊」

『伽婢子』: 五十日ばかりの後に、ある日萩原東寺にゆきて、卿公に礼拝して酒にえひて帰る。さすがに女の面かげこひしくや有けん、万寿寺の門前ちかく立よりて、内を見いれ侍べりしに、女たちまちに前にあらはれ、はなはだ恨みていふやう、

原作では喬生が再び湖心寺の前を通ったのは心にもない行動であるが、『伽婢子』では「さすがに女の面かげこひしくや有けん」ためである。そして、前者で男が寺門の前に着くと金蓮が出て来るのに対し、『伽婢子』では、浅茅（金蓮）の代わりに「女たちまちに前にあらはれ、はなはだ恨みていふ」のである。つまり、弥子（符女）が浅茅（金蓮）の出番を乗っ取ったのである。『北夢瑣言』の紅英から二分化し、それぞれの役目を守ってきた「牡丹灯記」の符女と金蓮は、こちらでは金蓮の役目が符女に奪われ、「伽」の役目しか残されてはいない。

③『怪談牡丹灯篭』

原作：十五夜三更盡遊人漸稀見一丫鬟挑雙頭牡丹燈前導一美人隨後約年十七八紅裙翠袖婷婷嫋嫋

『怪談牡丹灯篭』: 不図と見れば、先きへ立たのは、年頃三十位の大丸髷の、人柄のよい年増にて、其頃流行た縮緬細工の、牡丹芍薬などの花の付いた灯篭を提げ、其後から十七八とも思われる娘が、

符女（お露）は原作のまま「十七八とも思われる娘」であるが、金蓮（米）は「年頃三十位の大丸髷の、人柄のよい年増へと一変したのである。

臺灣大學學術期刊資料庫

原作：奉化符州判女麗卿之柩柩前懸一雙頭牡丹燈燈下立一盟器婢子背上有二字曰金蓮

『怪談牡丹灯篭』: 御堂の後に新墓が有りまして、夫に大きな角塔婆が有て、其前に牡丹花の綺麗な灯篭が雨ざらしに成てありまして、（中略）新「あの側に並べてある墓は。」僧「あれは其娘の御付の女中で是も引続き看病疲れで死去いたしたから、一所に葬られたので。」

原作での盟器婢子（金蓮）は『怪談牡丹灯篭』になると、「其娘の御付の女中で是も引続き看病疲れで死去いたしたから、一所に葬られた」生身の人間（米）に変身したのである。故に金蓮の盟器婢子とは性質が異なる。また生身の人間になりきった米であるからには、盟器婢子のようにお露を欲情の道へ導くようなことをせずに、寧ろ次のように勧戒の役を務めてさえいる。

『怪談牡丹灯篭』: 萩原の家は四方八方に御札が貼てあるので、二陰鬼が臆して後へ下がり、米「嬢様とても入れません。萩原様は御心変りが遊ばしまして、昨晩の御言葉と違ひ、貴嬢を入ないやうに戸締りが付きましたから、迚も入る事は出来ませんからお諦め遊ばしませ。心の変った男は迚も入れる気遣ひはありません。心の腐た男はお諦めあそばせ。と慰むれば、嬢「あれ程迄に御約束をしたのに、今夜に限り戸締りをするとは、男の心と秋の空、かわりはてたる萩原様の御心が情ない。米や、どうぞ萩原様に逢はせてをくれ。逢せてくれなければ私しは帰らないよ。と振袖を顔に当てて、潸然と泣く様子は、美しくもあり又物凄くもある」

五、おわりに

上述したように、瞿佑は「牡丹灯記」で符女と金蓮を以て人間の二面性、すなわち「礼教」と「欲情」を喩え、そして双頭牡丹灯でこれを象徴しようとしていた。しかし、『奇異雑談集』になると、「双頭牡丹灯」の用語は残っているものの、金蓮の出番の場面が削除さ

臺灣大學學術期刊資料庫

れ、符女と金蓮の役割分担のバランスがくずれる。『伽婢子』では、金蓮（浅茅）の出番のところが切り捨てられるのではなく、符女（弥子）が金蓮（浅茅）の役を代替してしまい、それによって、符女（弥子）が金蓮（浅茅）のかわりに能動的にプロットの発展を左右して行く。金蓮（浅茅）を傀儡化し、その役割分担の「欲情」の部分を奪ってきた符女（弥子）を象徴するのに「双頭」という用語は似合わず、「うつくしき牡丹の灯篭」の方がふさわしかったのではなかろうか。さて、さらに「怪談牡丹灯篭」になると、金蓮（米）と符女（お露）の役目が逆転する。金蓮（米）は盟器婢子から年増の献身的な生身の使用人へと変身し、符女（お露）を勧戒する役を担う。それに対して符女（お露）は欲情に縛られる。かくして日本の「牡丹灯記」の系譜においては、中国の原話が持っていた、盟器婢子の妖異や双頭牡丹灯の形象性が、あるいは異文化に対する理解の欠如のためか受け継がれず、もっぱら美女の幽霊が男に死をもたらすという怪異性の方が焦点化されるにいたったのだ、と結論づけられよう。

以上考察してきた三作には、前述したように人物造形や描写に原作と相違があっても、どちらも「符女」、「金蓮」、「双頭牡丹灯」に相当する人物や物が出てきている。しかし、例えば『諸国百物語』の「牡丹堂女しうしんの事」では「金蓮」が「雀」に、「双頭牡丹灯」が「牡丹堂」に、『怪世談』の「浮草」では「双頭牡丹灯」が薄物の袖に包んだ蛍に、『雨月物語』の「吉備津の釜」では「符女」が妬婦の怨霊になどと、性質の全く違ったものに書き換えられた例も見られる。こうした点も、異文化の受容とそれに導かれた創作という問題を考えていく上で甚だ興味深いものであるが、これらの詳しい考察は今後の課題にさせていただきたい。

臺灣大學學術期刊資料庫

使用テキスト

『奇異雑談集』「女人死後男を棺の内へ引込ころす事」（吉田幸一編『近世怪異小説』昭和三十年九月十五日、古典文庫刊）

『伽婢子』「牡丹灯籠」（東洋文庫、1987 年 9 月 10 日、平凡社）

「怪談牡丹灯篦」（三遊亭円朝、明治文学全集『三遊亭円朝集』、昭和四十年六月十日、筑摩書房）

『剪燈新話』（瞿佑著、古本小說集成、1994 年、上海古籍出版）

臺灣大學學術期刊資料庫